

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23300092

研究課題名(和文) テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパー・アーカイブの制作

研究課題名(英文) A research on Information Semiotics and Hyper-archive Platform

研究代表者

石田 英敬 (ISHIDA, HIDETAKA)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：70212892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,500,000円、(間接経費) 4,350,000円

研究成果の概要(和文)：テレビ番組に関する「意味の知」を構造化して「TVアーカイブ学」を体系化し、番組デジタル・アーカイブの理想的な構想と構築に役立てる研究である。情報技術(IT)をメディア研究に組み込むことをめざす<情報記号論 Information Semiotics>の新しい展開であり、研究成果は次の三つの次元からなる。(1)情報記号論にもとづく「テレビ・アーカイブ学」の体系化；(2)TV番組のハイパー・アーカイブ・プラットフォーム「Hyper PLATEAU」の制作；(3)日本のテレビの第一世代をつくった「放送人」たちの証言ビデオを使った、TVアーカイブ研究と日本テレビ史の実証研究。

研究成果の概要(英文)：This is an Information Semiotics study for TV digital archive which aims to synthesize the knowledge of TV archeology for conception of an ideal digital archive. The project consists in three dimensions. 1) Theoretical Research on TV archive and archeology of TV based on Information Semiotics. 2) Construction of a HyperPLATEAU, an experimental platform for TV archive. 3) Studies on the Japanese TV history with utilisation of more than one hundred fifty video interviews of the Association Hosojin no kai (veterans of the first TV generation in Japan).

研究分野：情報学・記号学

科研費の分科・細目：情報学・図書館情報学・人文社会情報学

キーワード：記号学 情報学 情報記号論 ハイパーメディア テレビ研究 メディア研究 人文情報学 アーカイブ学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、H.17-19 科研基盤(B)「テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパーメディア型事典の作成」（課題番号 17300080 研究代表者 石田英敬）及び H.20-22 科研基盤(B)「テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究と批評プラットフォームの制作」（課題番号 20300091 研究代表者 石田英敬）での研究をさらに発展させて、テレビ・コンテンツの情報記号論的研究を体系化し、テレビ分析の批評プラットフォーム「CriticalPLATEAU」（石田英敬研究室制作）のシステムを拡張し、IT 環境上にもう一対の「テレビ・アーカイブ学のためのハイパー・アーカイブ・プラットフォーム HyperPLATEAU」の設計、プロトタイプの実装と実証研究を行うことをめざしたものである。

2. 研究の目的

本研究において設定された達成目標は次の三点にまとめられる。

(1) 情報記号論にもとづく「テレビ・アーカイブ学」の体系化：

本研究では、テレビ・アーカイブ学の体系化を進め、「テレビ視聴のアーカイブ学」の定式化がめざされた。

(2) ハイパーアーカイブ・プラットフォーム「HyperPLATEAU」の実験制作：

Foucault の「知の考古学」のメタファーを採用して、「テレビ・アーカイブ学」研究の「情報の可視化と検索」のためのシステム環境を IT 上に構築することがめざされた。

先行研究で制作された批評プラットフォーム「Critical PLATEAU」の対部として、テレビ考古学のためのハイパー・アーカイブ・プラットフォーム「HyperPLATEAU」を制作することが目標として掲げられた。

(3) 実証研究と次世代アーカイブの提案：

大規模アーカイブス及びテレビ文化人との協力による実証研究「テレビの考古学調査」の組織と共同研究。

具体的には、「TV ドキュメンタリーの考古学調査」をテーマに、主に NHK のドキュメンタリー番組のメディア成層を分析調査する。一般社団法人「放送人の会」の証言ビデオ百数十件を対象に、TV 番組とオーラルヒストリー映像のリンク付けによる意味論的な「オーラルヒストリーにもとづく番組検索システム」を上記(2)のプラットフォーム上に実験制作することがめざされた。

「テレビ人の知」をアーカイブ・システムのなかに組み込み意味論的検索を可能にする研究である。これらの実証研究を踏まえ TV 番組ライブラリーのための「次世代アーカイブ」の提案を行うことがめざされた。

3. 研究の方法

本研究の方法の基軸となったのは、IT 環境をつかった「テレビ考古学」のためのハイ

パー・アーカイブ・プラットフォーム「HyperPLATEAU」の形成である。

「考古学(archeology)」を「アーカイブ学(archiveology)」の情報表現のためのメタファーに採用。プラットフォームの構成モジュールとして、①「考古学調査」の可視化インタフェース「ArcheoSCOPE」；②意味論的「発掘」の検索モジュールとして「ArcheoSEARCH」；意味分析のプロセスを経て、メタデータを付与された番組を格納し組織化する③アーカイブ・モジュールとして「HyperARCHIVE」を試作し配置する方法をとった。これら三つのモジュールからなるハイパー・アーカイブ・プラットフォームが「HyperPLATEAU」である。

理論面での基礎研究は、海外共同研究者で著名なメディア哲学者 B. Stiegler および彼の率いるフランス・ポンピドゥーセンター IRI 研究所の研究スタッフを共同研究者に毎月 1 回定例ビデオ会議研究会の組織、記号論関連研究知見のデータベース化、理論知識共有事典の作成、さらに国際シンポジウムの開催を通して実施された。

実証研究として、NHK ドキュメンタリー番組を題材とした「TV ドキュメンタリーの考古学調査」、放送人の会との協力による「オーラルヒストリーによる番組検索」研究を実行。その研究成果を、ハイパー・アーカイブに格納して知見を引き出し、情報記号論にもとづく「テレビ・アーカイブ学」の体系化を行うことがめざされた。

NHK 放送研究所、NHK アーカイブス、放送人の会、仏 INA および IRI との研究協力のもとに、研究会、ワークショップ、シンポジウムを実施して成果公表と知識共有を進め、システム開発は、日立ソリューションズ社、仏 IRI と共同で行った。

4. 研究成果

本研究課題の第一の成果は、IT 環境をつかった「テレビ考古学」のためのハイパー・アーカイブ・プラットフォーム「HyperPLATEAU」を試作し、それを使ったアーカイブ形成の実験を実現したことである。

(1) テレビ考古学のためのハイパー・アーカイブ・プラットフォーム「HyperPLATEAU」の制作実験：

上記に述べたように、「考古学」を「アーカイブ学」の情報表現のためのメタファーに採用。プラットフォームの構成モジュールとして、①「考古学調査」の可視化インタフェース「ArcheoSCOPE」；②意味論的「発掘」のための可視化検索モジュールとして「ArcheoSEARCH」；意味分析のプロセスを経て、メタデータを付与された番組を格納し組織化する③アーカイブ・モジュールとして「HyperARCHIVE」を試作した。

これら三つのモジュールからなるハイパー・アーカイブ・プラットフォームが

「HyperPLATEAU」である。

*

【「発掘の道具」その①「ArcheoSCOPE」】：フランス INAtèque で研究者用に実用化されている映像資料研究のための閲覧インタフェース「Mediascope」を参考に、ドキュメントインタビューのビューアー画面、カット割りの自動検出とメタデータ付与を連動させるウインドウ、画面上で語られている内容を歴史的な知識事典を連動させて知識検索を可能にするウインドウ、アーカイブに格納された比較可能なインタビュー映像リストを、統合的に扱うことができるインタフェース「ArcheoSCOPE」を試作した。

【「発掘の道具」その②「ArcheoSEARCH」】：一つの番組のセグメントから別の番組のセグメントへと、意味論的なネットワークが伸び、情報記号論の知識ベースとも連動して、テレビ分析の成果に基づいて、アーカイブのメディア層を横断的に検索することが可能な意味論的検索システム「ArcheoSEARCH」を試作した。

仏ポンピドゥーセンターIRI 開発のソフト
Lignes de temps

(<http://www.iri.centrepompidou.fr/outils/lignes-de-temps/>) にトピックマップ技術による知識ベース管理ソフト「知のコンシェルジュ」を連動させるあらたな技術開発を行って実装した。テレビ番組の任意のセグメントからアーカイブ上の他の番組の任意のセグメントへとリンクしうる環境を構築した。

③ 「HyperArchive」：意味分析のメタデータを付与された番組データを大容量サーバ上に格納し研究者間で共有システムするための情報記号論にもとづくテレビ・アーカイブ学のハイパー・アーカイブを試作した。本研究を通して生み出される「テレビ・アーカイブ学」の知識にもとづいて情報の自己組織化を実行するアーカイブである。メディア・クリティックを編成原理と動作に内在させたアーカイブである。

以上の3つのモジュールが、全体として批評プラットフォーム「CriticalPLATEAU」と対となることで、NHK アーカイブスのようなすでにある TV 番組アーカイブから取り出される研究素材が、CriticalPLATEAU によるミクロなメディア分析の過程をへて、情報記号論的なメタデータを付与され、さらにテレビ・アーカイブ学としての「知の構造化」をへて、意味論的検索が可能なハイパー・アーカイブを形成することになる。このようなアーカイブのセミオーシスのモデル化によるITプラットフォームが、テレビ・アーカイブ学のためのハイパー・アーカイブ・プラットフォーム「HyperPLATEAU」である。

(2) 情報記号論にもとづく「テレビ・アーカイブ学」の理論研究成果とその発表

理論研究は、計画通りフランスポンピドゥーセンターIRI 研究所との共同研究を軸に展

開された。

1) 基礎研究に関して研究代表者石田と研究分担者西兼志による、現代の代表的なメディア哲学者で研究協力者の Bernard Stiegler の主著『技術と時間』全三巻の翻訳の完結というかたちで、2013年3月に研究成果を世に出すことができた。

2) また IRI との国際共同研究の成果は、2011年10月22日にはフランス、リヨン Villa Gillet で開催された東大フォーラム国際シンポジウム「日本のメディア文化：カタストロフィとメディア Culture des média dans le Japon contemporain: Catastrophe et Média」(主催 Villa Gillet / 東京大学情報学環・メディア・コンテンツ研究機構) で発表された(講師は、石田英敬(東大フォーラム2011実行委員会委員長、東京大学大学院情報学環長、Bernard Stiegler (Directeur, IRI / philosophie), Robin Renucci (Acteur) 藤幡正樹(東京藝術大学大学院映像研究科教授)、吉見俊哉(東京大学大学院情報学環教授))。

3) さらに同年12月19日には、フランス、ポンピドゥーセンターにおける国際シンポジウム「テクノロジーと信頼性」において、研究代表者の石田が、B. ステイグレル、リスク社会論のウルリッヒ・ベック等と基調講演を行った(《Catastrophe et media: le temps des catastrophes et la question de la confiance 》, Conférence ENMI 2011 "TECHNOLOGIE et CONFIANCE" Déc. 19, 2011 Centre Pompidou, Paris)。

4) 理論的基礎研究での国際協働および学際的な研究体制の立ち上げの動きは、2012年には、仏ポンピドゥー・センターIRIを中心に、INRIA, Univ. of Lyonなどのフランス学術機関、英 Cambridge, Goldsmiths, 米 UC Berkeley, UC Santa Cruz, Tufts, 独 Bochum, アイルランド Dublin などの国際研究機関を結んだ、Digital Studies 研究グループの結成へと発展した(<http://digital-studies.org/>)。同年12月17日仏ポンピドゥー・センターで開催された国際会議 Conférence ENMI 2012 "Digital Studies" で石田が基調講演(《Hybrid Reading et Digital Studies》, Conférence ENMI 2012 "Digital Studies" Déc. 17, 2012 Centre Pompidou, Paris)、ハイパー・アーカイブ研究を進展させてデジタル・スタディーズの展望を開くハイパー・リーディングについての研究成果を公表した。

5) IT をベースとした人文学の革新の国際的な研究展開である Digital Humanities の世界組織 ADHO に日本の学会組織 JADH(<http://www.jadh.org>)が加盟を果たしたことを受けて2012年9月15日から17日にかけて東京大学本郷キャンパス工学部2号館で開催された日本デジタル・ヒューマニティーズ学会主催による国際大会 JADH2012 に

においては、研究代表者の石田が、9月15日、Opening Address を行い、Digital Humanities の国際研究展開への貢献の方向を提示した。

以上は、ハイパー・メディア・アーカイブの研究の視点からのアーカイブ学の理論研究成果であると同時に、国際的な研究展開のための研究成果の発信、国際的な研究体制立ち上げにおいて果たし得た貢献である。

(3) テレビ・アーカイブの実証研究と次世代アーカイブの提案

テレビ番組アーカイブの実証研究および次世代アーカイブの提案に向けた研究は、一般社団法人「放送人の会」およびNHK放送文化研究所との協働のもとに実施された。

まず三年間にわたる基礎的なデータベース構築作業をとおして実現されたのが、「放送人の会」が記録し続けている現状(2014年3月)170件に達する日本の放送史にかかわる放送人による証言ビデオのアーカイブ化である。

放送人の会より提供を受けた証言ビデオをデータベース化して証言ビデオの網羅的な文字起こし作業を実施。放送史の専門家の協力をえて、固有名・人物の特定、発言内容の史実的確定、参照の裏付け等の校訂および注釈を付与し、テキストを確定できた85件に関して、2014年2月1日版『放送人の証言集』(放送人の会、書き起こし、注釈付き)(全8巻、3680頁、東京大学大学院情報学環メディア・コンテンツ研究機構所蔵)を集成した。

この膨大なコーパスにもとづき、上記(1)のハイパー・アーカイブ・プラットフォーム「HyperPlateau」のメタデータ付与の実験制作に活用すると同時に、テレビ史に関する研究例会およびシンポジウム、学会を開催して、放送人の証言にもとづくテレビ・アーカイブ制作の可能性について研究成果を発表した。

1) まず研究初年度の2011年9月24日には、研究代表者石田、分担研究者吉見、連携研究者桜井が中心となって、東京大学大学院情報学環メディア・コンテンツ研究機構主催のラウンドテーブル「テクノロジー／アーカイブが紡ぐ協働知の新展開」(東京大学本郷キャンパス福武ホール)を開催して、認知テクノロジーを駆使した次世代アーカイブの方向性を提起した。

2) 二年目の2012年には、日本マスコミ学会第33期第8回研究会「テレビ研究における「口述資料」「証言」の可能性～草創期「放送人」の相関関係を抽出する試みを例として～」(日本マスコミ学会放送研究部会企画、東京大学大学院情報学環メディア・コンテンツ総合研究機構共催 東京大学本郷キャンパス 福武ホール 福武ラーニング・スタジオ、2012年12月1日)において、研究代表者石田が包括コメント、連携研究者の桜井均と三分一信之氏(日立ソリューションズ)がハイパー・アーカイブ・プラットフォーム「HyperPlateau」のデモを行った。

3) 2011年<3・11>東日本大震災および福島第

一原発事故を受けて、本研究においても、テレビ・アーカイブ研究の学術的視点から、<3・11>後のテレビ番組のアーカイブ化と分析的な研究を蓄積し、2013年7月13日には、その研究成果を、「未来へのアーカイブ：原発事故・放射能汚染の過去／未来」と題したシンポジウムを開催(主催：一般社団法人 放送人の会 + 東京大学大学院情報学環 メディア・コンテンツ総合研究機構 東京大学駒場Iキャンパス21KOMCEE レクチャーホール)、連携研究者桜井が「アーカイブが「予見」するフクシマの未来：チェルノブイリからフクシマまで」と題して発表、代表者石田が「フクシマ後にテレビは何を語れるのか」と題してコメント、研究分担者の西が司会をつとめ、テレビ番組に関する震災アーカイブのあり方を提起した。

4) 2014年2月22日には、上記の『放送人の証言集』全8巻の完成をうけて、東京大学大学院情報学環 メディア・コンテンツ研究機構 主催一般社団法人 放送人の会 共催 氏シンポジウム「第一回 <日本テレビ史序説>研究会：テレビが社会を描き出そうとしていた時代」を開催(2014年2月22日東京大学本郷キャンパス福武ホール、福武ラーニングスタジオ)。研究代表者石田が「テレビはどのように社会を描いたか：和田勉・今野勉・大山勝美の番組を通して」、連携研究者桜井が「放送人たちと占領期そして戦後社会：他律と自律のはざままで」を研究報告、放送に携わった当事者たちの証言と映像アーカイブの内側から戦後日本のメディア史を記述し再構築するため、<日本テレビ史序説>研究会を発足させた。

*

以上が、三年間にわたる「テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパー・アーカイブの制作」の研究成果の概要である。

この研究により、IT技術が可能にする巨大なハイパー・アーカイブの形成、ITの認知的なポテンシャルを活用する情報記号論の方法による番組の意味分析の方法、研究成果の共有環境の構築、それぞれの有効性が確認された。

そこから引き出されるのは、従来は人文的研究に依存してきた文化的意味の研究が、認知的技術の活用によって、情報技術と連続して実現しようという、次世代型のメディア研究の姿が具体的に提示された。またその方向は、Digital Humanities や Digital Studies という国際的な新しい研究動向と協働しようのものであり、その理論化についても、アクティブな貢献が可能であることが確認された。

さらにまた、六〇年にわたるテレビ放送史の立役者たちの証言ビデオをコーパスとしてテレビ番組のアーカイブを構築し、そこから日本テレビ史へといたる、テレビ・アーカイブの構築の提案であると同時に、メディア史研究の新たな方法の提示でもある実証的

な研究の姿を提示しえたと総括できる。

本研究においてえられた成果は、知的所有権等の問題から、とくにテレビ番組映像等について、そのままでは公開できない部分もあるが、やがてはしかなるべき権利処理や関係機関の協力をえて実際に社会に広く公開しうるアーカイブにも適用しうるものである。また、今回の研究でえられた学術的知見については、あらためて、研究論文や学術書として公刊されることになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

(1) 桜井均、七沢潔 「制作者研究〈テレビの“青春時代”を駆け抜ける〉【第1回】吉野兼司 (NHK) ～“歳月”を撮ったカメラマン～」、『放送研究と調査』2013年11月号、pp. 2-21, 2013年11月。pp. 2-19

(2) Hidetaka Ishida : 《Body and Letters in the Age of New Media》, *Semiotic Inquiry* No. 35, Korean Association for Semiotic Studies, June 30 2013, Seoul, Korea, pp. 33-49

(3) 石田英敬 : 『『マラルメ・プロジェクト』讃』『舞台芸術』Vol. 17 Spring 2013 角川学芸出版, pp. 160-165 (2013年3月25日刊)

(4) 石田英敬 : 『『負の時代』のメディア政治のゆくえ : 『不思議メモ帳』覚え書き』、『世界』、岩波書店、No. 841 別冊「政治を立て直す」、2013年3月1日発行、pp. 140-147

(5) 桜井均、東野真 「制作者研究〈テレビ・ドキュメンタリーを創った人々〉【第1回】小倉一郎 (NHK) ～映像と音で証拠立てる～」、『放送研究と調査』2012年2月号、pp. 2-21, 2012年2月。

(6) Hidetaka Ishida: 《L' espoir d' un nouveau souffle》, *Le Monde diplomatique*, Paris France avril 2011, <http://www.monde-diplomatique.fr/2011/04/HIDETAKA/20438>

(7) 水島久光、西兼志、桜井均「NHK アーカイブスの構成に関する研究」、前編 : 『放送研究と調査』4月号、NHK 放送文化研究所、pp. 38 ~57、2011年4月。後編 : 『放送研究と調査』6月号、NHK 放送文化研究所、pp. 84 ~101、2011年6月。

[学会発表] (計 12 件)

(1) 石田英敬、桜井均 : (組織と発表) 東京大学大学院情報学環 メディア・コンテンツ研究機構 主催一般社団法人 放送人の会 共催シンポジウム「第一回 <日本テレビ史序説>研究会 : テレビが社会を描き出そうとしていた時代」 2014年2月22日東京大学本郷キャンパス福武ホール、福武ラーニングスタジオ

(2) Hidetaka Ishida : (基調講演) 《Information Semiotics of Hybrid Reading : On Beyond Pages of Masaki Fujihata》, *Body Image Media*, Center for

Applied Cultural Sciences, 29 Nov. 2013 Seoul Korea

(3) Hidetaka Ishida: (招待講演) 《La preuve par l' image》 Le Festival Mode d' Emploi Samedi 23 novembre 2013 Hôtel de Région, 1 Esplanade François Mitterrand - Lyon France

(4) 石田英敬、桜井均 (組織と発表) : シンポジウム「未来へのアーカイブ : 原発事故・放射能汚染の過去/未来」(主催 : 一般社団法人 放送人の会 + 東京大学大学院情報学環 メディア・コンテンツ総合研究機構) 2013年7月13日、東京大学駒場 I キャンパス 21KOMCEE レクチャーホール

(5) Hidetaka Ishida: (招待基調講演) 《Body and Letters in the Age of New Media》、Korean Association for Semiotic Studies Conference, April 27 2013 Korea University, Seoul Korea

(6) 石田英敬、桜井均 (組織と発表) : 日本マスコミ学会 第33期第8回研究会「テレビ研究における「口述資料」「証言」の可能性～草創期「放送人」の相関関係を抽出する試みを例として～」(日本マスコミ学会放送研究部会企画、東京大学大学院情報学環メディア・コンテンツ総合研究機構共催) 2012年12月1日 東京大学本郷キャンパス 福武ホール 福武ラーニング・スタジオ

(7) Hidetaka Ishida: (招待講演) 《Hybrid Reading et Digital Studies》, Conférence ENMI 2012 "Digital Studies" Déc. 17, 2012 Centre Pompidou, Paris

(8) Hidetaka Ishida: (Opening Address) JADH 2012 conference "Inheriting Humanities". Sept. 5 2012 University of Tokyo. Faculty of Engineering

(9) Hidetaka Ishida: (招待講演) 《Catastrophe et media: le temps des catastrophes et la question de la confiance》, Conférence ENMI 2011 "TECHNOLOGIE et CONFIANCE" Déc. 19, 2011 Centre Pompidou, Paris France

(10) Hidetaka Ishida: (招待講演) 《Catastrophe and Media》, SNU-Tidai Symposium 2011, november 10 2011、東大山中寮

(11) Hidetaka Ishida: (実行委員長、総合司会、基調講演) 国際シンポジウム 《Culture des média dans le Japon contemporain: Catastrophe et Média》, à la Villa Gillet Lyon France, le 22 octobre 2011

(12) 石田英敬・吉見俊哉 : (実行委員長、総合司会) 東京大学大学院情報学環メディア・コンテンツ研究機構主催ラウンドテーブル「テクノロジー/アーカイブが紡ぐ協働知の新展開」、2011年9月24日、東京大学本郷キャンパス福武ホール

[図書] (計 11 件)

(1) 石田英敬・立花隆「読書の未来」、立花隆

『読書脳：ぼくの深読み 300 冊の記録』巻頭対談、

350 頁、2013 年 12 月 9 日、文藝春秋 刊、pp. 13-45

(2) ベルナル・スティグレル 『技術と時間 3 映画の時間と<難・存在>の問題』(石田英敬 監修 西兼志 訳)、法政大学出版局、410 頁、2013 年 3 月 27 日刊

(3) Hidetaka Ishida: « Catastrophe et médias : la culture des médias dans le Japon contemporain », in **Confiance Croyance Crédit dans les mondes industriels**, sous la direction de Bernard Stiegler, Collective du Nouveau Monde industriel, FYP éditions(France), août 2012. 252p., pp.127-150.

(4) 高野明彦、吉見俊哉、三浦伸也『311 情報学：メディアは何をどう伝えたか(叢書 震災と社会)』、岩波書店、200 頁、2012 年 8 月。

(5) 吉見俊哉『夢の原子力』、ちくま新書、筑摩書房、302 頁、2012 年 8 月。

(6) 土屋由香、吉見俊哉『占領する眼・占領する声：CIE/USIS 映画と VOA ラジオ』、岩波書店、398 頁、2012 年 7 月。

(7) 丹羽美之、吉見俊哉『岩波映画の 1 億フレーム(記録映画アーカイブ)』、東京大学出版会、362 頁、2012 年 6 月。

(8) 石田英敬：『加藤周一における「時間と空間」』、ジュリー・ブロック編、かもがわ出版、2012 年 6 月 30 日刊、第一章「啓蒙とは何か：普遍的知識人のエトスについて」、pp.72-80 分担執筆

(9) Hidetaka Ishida: « Qu'est-ce que les Lumières : sur l'éthos d'un intellectuel universel », in *Katô Shûichi ou pener la diversité culturelle*, sous la direction de Jean-François Sabouret, CNRS Editions, janvier Paris 2012, 114 p. , pp. 57-62.

(10) Hidetaka Ishida: « La force de l'impermanence de un espoir de l'esprit », in *L'Archipel des séismes*, sous la direction de Corinne Quentin et Cécile Sakai, éd. Picquier Poche, février 2012, 410 p. pp. 61-70

(11) 石川徹也、根本彰、吉見俊哉(編)『つながる図書館・博物館・文書館：デジタル化時代の知の基盤づくりへ』、東京大学出版会、280 頁、2011 年 5 月。

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

東京大学石田英敬研究室

<http://www.nulptyx.com>

東京大学大学院情報学環メディア・コンテンツ研究機構

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/about/facilities/media>

仏ポンピドゥーセンターIRI 研究所

<http://www.iri.centrepompidou.fr>

Digital Studies Org.

<http://digital-studies.org/wp/>

Japanese Association for Digital Humanities

<http://www.jadh.org/>

放送人の会

<http://www.hosojin.com/>

NHK 放送文化研究所

<http://www.nhk.or.jp/bunken/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田英敬 (ISHIDA HIDETAKA)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：70212892

(2) 研究分担者

吉見俊哉 (YOSHIMI SHUNNYA)

東京大学・大学院情報学環・教授

研究者番号：40201040

西兼志 (NISHI KENJI)

成蹊大学・文学部・准教授

研究者番号：20599550

(3) 連携研究者

桜井均 (SAKURAI HITOSHI)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：80595851